維納の森殺人事件
社会派国際ミステリー
政・財・官界、三者ぐるみの構造汚職!!
高柳芳夫

定価—六八〇円

維納の森殺人事件

著者—高柳芳夫

昭和五十九年六月十日　第一刷発行

発行者—清水文人／発行所—㈱双葉社
東京都新宿区東五軒町三番二八号（郵便番号一六二）
電話・東京〇三—二六八—五一一一（代表）
振替・東京八—一一七二九九

印刷—慶昌堂印刷株式会社
製本—㈱川島製本所

●落丁本・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

© Yoshio Takayanagi 1984 Printed in Japan

維納の森殺人事件

社会派国際ミステリー

政・財・官界、三者ぐるみの構造汚職!!

高柳芳夫

維納の森殺人事件

KDK事件の背景には、いまだに行方が知れず、そして、行方知れずのまま捜査の打ち切られた交際費四十七億円が絡んでいると、彼は信じていた。もともと国民からむしり取った金である。しかも、三月以来調査してきて、草葉は、この消えた膨大な金のうちかなりの金額が、一部の人間の欲望と権力の充足のために闇から闇に動いた、という確信を深めていた。日本人は熱しやすく冷めやすい。淡泊といえば、聞こえはいいが、マスコミも国民も、次ぎ次ぎに起こる事件を追うのに忙しく、過去の事件は簡単に忘れてしまう。

のやす、日本から大使館に空送されてくる新聞で、わずか二千万円たやす程度の横領や外国為替管理法違反容疑で坂野社長、伊藤社長くれ、そが起訴され、それでKDK事件は決着したといわんばかりのマやり、やり場のない怒りを感じていた。——政・財・官界、三者そのみの構造汚職は、その舞台をヨーロッパに拡大させた。

●定価680円　双葉社　0293-720083-7336

高柳芳夫

社会派国際ミステリー

維納（ウィーン）の森殺人事件

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　赤毛の美女……8
第二章　影の殺人者……20
第三章　惨劇の窓……32
第四章　消えた死体……47
第五章　蠢く森……63
第六章　容疑者の逮捕……71
第七章　恐怖の軌跡……82
第八章　秘密社交クラブの女……93
第九章　憎悪の報酬……107
第十章　NHK紅白歌合戦……119

第十一章　旅券の陥穽……134
第十二章　身代りの周辺……144
第十三章　錯誤の追跡……156
第十四章　美女たちの館……166
第十五章　音声の死角……176
第十六章　主のないアパート……189
第十七章　ジャガーに乗る女……201
第十八章　犯罪の論理……210

西ドイツ
ボーデン湖
フランス
オーストリア
チューリヒ
ベルン
ルツェルン
レマン湖
アルトドルフ
ジュネーヴ
スイス
聖ゴタール峠
ユングフラウ
チチィーノ州
ロカルノ
ロンコ
マジョーレ湖
イタリア
西ドイツ
東ドイツ
ポーランド
チェコスロバキア
フランス
ウィーン
ベルン
スイス
オーストリア
ハンガリー
イタリア
ユーゴスラビア

第一章　赤毛の美女

1

事件は、ウィーンの国立オペラ劇場からはじまった。

三月十八日の晩である。

その晩、在ウィーン日本大使館の二等書記官草葉宗平は、国立オペラ劇場の二階正面の桟敷席に座っていた。前をのぞいて周囲を仕切った箱型の貴賓席である。

舞台を正面にして一階の一般席を取り巻くように、桟敷席は二階から四階までつづいている。壁に浮き彫り模様の装飾のある、赤じゅうたんを敷きつめた、広くて豪華な劇場であった。

その晩の演し物は、イタリアの作曲家ジュセッペ・ヴェルディの歌劇『リゴレット』であった。

いま、舞台の上では、太腿に食い込むようなぴったりした白タイツに、光沢のある銀色のゆったりした上衣をつけ、腰に剣を吊った貴公子が、顔をやや上に向け、両手を前へつき出して歌っていた。

女蕩らしのマントヴァ公爵である。

風のなかの
羽根のように
いつも変る女ごころ

次ぎ次ぎに女を征服する楽しみと女ごころの移ろいやすさを歌うマントヴァ公爵のアリアは、軽快で美しいオーケストラの伴奏に乗って、静まり返った劇場内の空気をふるわせて響いた。ヨーロッパでも有名なバリトン歌手である。

オペラは、第三幕の終りに近づいていた。

美貌の貴公子で、漁色家のマントヴァ公爵は、次ぎ次ぎに美しい女を誘惑しては捨てて、恥じるところがない。公爵の乱行の手助けをするのは、せむしの道化リゴレットである。

娘を公爵に弄ばれたモンテローネ伯爵は、公爵に抗議し、獄舎に引かれるが、去りぎわに公爵の手先きリゴレットに呪いの言葉を浴びせる。

呪いは現実となり、リゴレットの愛娘で清純なジルダもまた、公爵に汚される。

復讐を誓ったリゴレットは、刺客スパラフチレに公爵の暗殺を依頼する。暗殺の計画を立ち聞きしたジルダは、愛ゆえに男装し、雷雨にまぎれて公爵の身替りに立ち、スパラフチレに刺殺される。

刺客から死体の入った袋を受け取り、それを川に投げ込もうとしたリゴレットは、ふと公爵が得意になって歌う『女ごころの歌』を耳にする。

驚いて袋を開け、断末魔の苦悶に歪む娘ジルダの顔を見て、リゴレットは、身悶えして悲嘆にくれる。

いま舞台は、その終幕の山場にかかっていた。

公爵の歌声を、戸の外で、リゴレットが聴いている。醜いせむし男の躰がふるえ、驚きと狼狽に身悶えする。

階下の一般席から四階の桟敷席、そして、さらにその上の立見の天井桟敷まで劇場を一杯に埋めた聴衆は、固唾を呑んで舞台に目を向けていた。

そのとき、

「グ、グウ、フウッー」

と、奇妙な音が、草葉のとなりの暗がりで起こった。

大臣や外国からの賓客が座る貴賓席である。左右と背後は壁で仕切られているので、となりの桟敷席には聞こえなかったろう。だが、動物のうめきのようなその音は、だんだん大きくなって行くようで、草葉は気が気でなかった。

そっと、となりを覗く。

椅子からほとんど落ちそうな恰好で、自由党の代議士山川甚兵衛が眠っていた。脚を開き、口を開け、いびきをかいている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まくれた厚い唇から、煙草のやにで汚れた不揃いな歯が覗いている。赧黒い顔の中央にがっしりと大きな鼻がついていて、その小鼻から、白髪のまじった長い鼻毛が飛び出している。鼻毛には、米粒ほどの大きさの鼻くそがひっかかり、それが、息が吐き出されるたびにふるえて、いまにも黒背広の上に落ちそうになる。

その向うの、山川の秘書の木下太郎も寝ているのだろう。目を閉じて背もたれに頭を乗せていた。

草葉宗平は、苦笑した。

「ふむ、オペラか。ウィーンに来たのだから、一度は見てもいいな。とにかく、ここのオペラは、ミラノのスカラ座と並んで、世界最高だからな」

昼食のテーブルで晩の予定を告げたとき、山川甚兵衛は、そう言い、いかにも音楽に関心のある口吻を洩らした。

だが、そのあとがいけなかった。演し物は『リゴレット』だと告げたとき、

「うむ、あれはいい。プッチーニの作品でも『マダム・バタフライ』と並ぶ傑作だ」

と言ったのには、内心唖然とした。なんにも知らないのである。

もちろん、オペラなど知らなくたって、べつにどうということはない。草葉だって、知らないオペラや音楽はたくさんある。それはいいのだが、知らないのに知っているような振りをするのが、子供じみて滑稽である。山川には、そんなところがある。草葉の前で、秘書の木下にむやみに威張りちらすが、木下は、かげで舌を出している。木下は、山川の見せかけだけの本質を見抜いているのである。

山川甚兵衛は、自由党で最大の派閥を誇る飛田角造派の幹部代議士で、かつて自治大臣と文部大臣をそれぞれ一期ずつ勤めたことのある政治家だという。よく文部大臣が勤まったと思うほどヨーロッパ事情やその文化を知らない。

ベートーヴェンの住んだ家やハプスブルク王朝代々の君主が住んだホーフブルク王宮やパリのベルサイユ宮殿の向うを張って造られたというシェーンブルン宮

殿や壮麗なシュテファン大寺院やその他の名所旧跡や美術館、博物館に案内しても、ろくに見もしなければ、説明も聞かない。退屈そうに顔をしかめている。

美術館や博物館では、疲れるのかすぐ椅子に腰を下ろし、座ったらなかなか動こうともしない。

そのくせ、目の前を若い女が通ると、赤く濁った目を好色そうに細めて、顔から胸、腰、そして脚へと粘るような視線を這わせる。

仕事とはいえ、こんな代議士につきっきりでサービスしなければならぬ草葉も、いい迷惑だが、外務大臣からの訓令のきている賓客とあれば仕方なかった。

とにかく、草葉は、今日まで三日間観光や食事や買物とはれものに触れるような気持で世話をし、供をしてきた。

今回のフランス、スイス、オーストリア三カ国訪問の目的は、衆議院の文教委員としてヨーロッパの文化と教育制度の視察だというが、それは体のいい口実で、本当の目的は、国会休会中の息抜きの物見遊山か、そうでなければ、なにか他に目的があるのではないか、と草葉には思えた。とにかく、ウィーンに来て三日、申し訳程度に小学校を一つ見学しただけで、あとは毎日ぶらぶら遊んでばかりいたからである。

2

しかし……と草葉宗平は、鼻毛をふるわせて眠っている山川甚兵衛を見ながら考えた。

この山川は、女好きで柄が悪く、教養はないが、どこか老獪で、ときにどきりとさせるような不気味さを見せることがある。一見子供じみて八方破れの隙だらけだが、どうしてただ者ではないと、草葉は思うことがあった。

たとえば、急に黙り込んで、話しかけても返事しない。そんなときの彼は、魁偉な風貌だけに、凄味さえ加わった威厳がある。

そして、また不意にどこかに消えてしまうことがあるのも、変である。ホテルで休みたいからひとりにしてくれと、草葉を追い払ってしまう。来いと言われた

時刻に行ってみると、部屋にいない。ロビーで待っていると、人目をはばかるような様子でホテルに入って来る。秘書も連れず一人である。いったいどこに行っていたのか。外国語のできぬ山川である。だが、それを訊くわけにいかない。

山川には、ときどき不審な行動があった。

股を広げ、いびきをかいている山川を見ているうちに、草葉の脳裏に、ふと先刻幕間の休憩時間に見た光景が思い浮かんだ。

たいしたことでなかったが、そのときの山川の態度はちょっと草葉の注意を惹いた。

それは、第二幕が終った休憩時間であった。

草葉は、山川と木下を階下のロビーに案内した。

一階のロビーの隅にスタンドがあり、飲み物や軽食を売っている。

草葉は、人群れを掻きわけて、スタンドに辿りつき、ブランディのグラスを三つ持って戻って来た。

山川は、ロビーの隅に立っていた。目の前を着飾った男女がゆっくり通り過ぎる。草葉から受け取ったグラスを口に運びながらも、山川は、きょろきょろと周囲を通る女に目を這わせていた。

草葉は、山川の背後に立って煙草に火をつけた。

さすが伝統を誇るウィーンの国立オペラ劇場である。ロビーをそぞろ歩きする人群れのなかには、若く美しい女性も少なくなかった。生粋のウィーン娘であろう。体型が細っそりして、優美な感じの女性が多い。髪の毛も金髪は少なく、黒味がかった褐色が多い。色は白く、顔は面長でノーブルな顔つきをしている。同じゲルマン系でも、ドイツ人とは少しちがう。まさに日本人好みの美人が多い。そうした美人が、恋人らしい青年や、父親らしい年輩の紳士と腕を組んで通りすぎる。

山川は、そんな女たちを見るのには飽きないらしかった。あちこち目を動かしていたが、不意に、

「あっ」

と、小さな叫びを洩らした。

草葉は、山川の視線の先に目をやった。

ちょうど、階段の背後から、二人の男が姿を見せた

ところであった。日本人であった。若い男と年輩の紳士で、二人とも、せかせかした足どりで落着きがないように見えた。

3

二人の日本人は、人群れを掻き分け、飲み物のスタンドに向った。若い男が先に立ち、そのうしろに五十二、三歳と思われる紳士がついて行く。

若い男は、草葉も知っている森谷明夫（もりやあきお）という名の留学生である。日本のKDK（国際電話会社）の社員で、会社から派遣されてウィーンでドイツ語の研修をしていると聞いていた。二、三度会っただけで、深いつき合いはなかった。日本人会の会合や日本大使が招待する天皇誕生日のパーティなどで短い挨拶を交わした程度の関係である。真面目そうだが、神経質で線の細い性格の青年のようである。

うしろの男は、上質のグレイの背広を着ているが、青黒い顔色の、あまり見栄えのしない初老の男であった。落ちくぼんだ丸い目が、きょろきょろと落着きなく動いている。

森谷は、スタンドに辿りつき、シェリーのグラスを二つ持って来て、その一つを男にうやうやしく差し出している。男に対するへりくだった態度から、その男が森谷にとって上司か身分の高い男であるように草葉には見えた。

「あいつ、こんなところに……」

山川甚兵衛は、呟いた。男に向けた山川の目には、非難するような光があった。

「あの男を知っているんですか」

「いや、その……ちょっと東京でな」

山川の目にかすかだが狼狽の色が走った。山川は、それきり黙ってしまった。

森谷明夫と男は、山川らが自分の方を見ているのに気付かず、スタンドを離れて、こちらへ近づいてきた。

そのとき、人群れのなかから、不意に一人の女が現われた。横を向いていたので、女は、かなり強く男に

ぶつかった。
男の手が揺れた。グラスからシェリーがこぼれて、背広の前にかかった。
「あら、失礼しました」
女の口から出たのは、きれいな発音のフランス語であった。女は、ハンドバッグからハンケチを取り出して、男の背広を拭おうと手を伸ばした。燃えるような赤毛の女であった。
「おお」
女を見上げた男は、引きつったような叫びを上げて立ち竦んだ。
その叫びに、周囲の二、三人が、振り返った。
だが、飲み物をこぼされた男とつき当った女を見て、興味なさそうにまた顔を戻して歩き去って行った。
女は、美しかった。大きく胸を開けた黒のコクテルドレスが恰好よく発達した肢体をぴったり包んでいる。むき出しの首や肩は大理石のようにすべらかで白い。背は高からず、低からずといった感じで、整った顔立ちは、少し冷たい印象を与えるが、豊かに波うって肩から隆起したバストまでかかる赤毛が、その顔の冷たさに華やかさを加えているのが、少しちぐはぐの感じがした。
白い歯を見せて詫びの言葉を述べ、女は、素早く人混みのなかに消えた。
ほんの短い時間だったが、草葉は、その女をどこかで見たような気がした。しかし、始めて会った女であることは間違いなかった。あとですぐ気付いたのが、その女を見たと思ったのは、映画で見たアン・マーグレットとかいう米国の肉体派女優との類似からだと悟った。もっとも、その女はアン・マーグレットほど太ってはいなかった。アン・マーグレットより、赤毛をのぞけば、上品な美しさがあると思った。
「どうしたんです」
森谷が男に訊くのが、聞こえた。
「あの女、知っているんだ」
女の消えた方に目を据えている男の顔には、恐怖に似た興奮が浮かんでいた。
「どうかしましたか」

草葉は、近寄って男に声をかけた。日本大使館の領事部主任として、長年外国に滞在する日本人や日本人旅行者にかかわる事件の処理や世話に当ってきた経験が、咄嗟にそんな行動を取らせたのである。明確な意識はなかったが、そのときすでに、草葉の第六感は、その後に起こる奇怪な事件のにおいを感じとっていたのである。

4

「あなたは？」

男は、草葉に訊いた。草葉は、日本大使館に勤めている者だと自己紹介した。

男の顔に、とたんに安堵したような表情が浮かんだ。

「わたしは、こういう者です」

男は、ポケットの名刺を取り出して草葉に渡した。

ＫＤＫ（国際電話会社）副参与

赤井徳治

と印刷されてあった。

ＫＤＫ（国際電話会社）といえば、三年前巨額の交際費を濫費し、政、官界へ賄賂を贈ったという疑惑を受けて、捜査の手が入り評判となった会社ではないか。当時は連日、新聞やテレビが、大きく報道し、日本の全国民が注目した会社であった。

目まぐるしく社会は変り、次ぎから次ぎへと起こる新しい事件を追うのにジャーナリズムは忙しく、そのうえ日本人は忘れっぽく、飽きっぽいので、いまでは、もうまったく報道されることなく、ほとんど人の口にのぼることもないが、草葉は、当時外務本省から大使館に空送されてくる新聞を読んで、強い衝激と怒りを感じたのを、いまでも覚えている。

ＫＤＫ（国際電話会社）は、日本国内の電信電話業務を一手にとり扱う独占企業である。国内の電信電話業務だけでなく、日本と海外との電信電話電報業務をも行っている。競争相手のない独占企業なので、電報

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com